

文 献 総 覧

依 存 性 の 研 究*

東 京 大 学

江 口 恵 子**

概 観

依存性の研究は歴史的にみると、親子関係の研究、しつけについての研究などの随伴物として始められた。したがって、依存性の研究は、親子関係に関する本格的な心理学的研究がさかんになりだした1940年代からしだいに始まったといっている。しかし、依存性そのものとして単独に問題にされるようになったのは、1953年の Sears, R. R. らの研究からである。これは、それ以前の依存性についての研究の集大成をするとともに、その後の依存性の研究の方向と方法を規定してしまうという役割りを果たした。ほぼこの論文を契機にして、依存性という概念が親子関係と人格形成を記述する際の有効な変数のひとつとしての位置を占めるようになったのである。

わが国においても Sears らの影響は大きく、本格的に依存性が問題にされたのは、Sears らの結果を日本の幼児において検討するというかたちでなされた津守・稲毛(1960)が最初である。が、最近では青年期における依存性の問題、社会的同調性の問題、依存性概念の検討の問題など種々の角度から独自の研究が進められている。

以上のように、近年、内外において依存性の概念は人格研究のなかでかなり重要な概念のひとつになってきたといえよう。ここ10余年間には依存性についての研究は直接これを扱ったものだけでも80に近くなっている。1963年版のNSS Eの「児童心理学」(Stevenson, H. W. et al., 1963)においては、「同一視」、^{*}「攻撃性」、^{*}「達成動機」、^{*}「不安」とともに、「依存性と自立性」の章がもうけられている。この章を担当した Hartup, W. W. (1963) は、依存性と自立性についての文献総覧をした

あとで、以下のように述べている。「依存性や自立性というような巨視的な構成概念が対人的行動を統御し、予想するための試みにおいて、科学者にとってどの程度長い期間有効であり続けるかは明らかではないが、いまのところこれらの概念は、子どものパーソナリティや社会的行動を記述するために用いられる語いの中に、確実に入っている。」

依存性の概念と測定

1. 依存性の定義

依存性とは何か、あるいは、何を依存性とよぶかはいたってあいまいである。が、従来の研究のだいたいの一致点は、「人間対人間の行動についていうもので、社会的行動のひとつの形式であって、他人との接触あるいは、他人からの養護によって生ずる満足に向けられた行動をあらわす」ということになる。(Hartup W. W., 1963)

たとえば、Bandura, A. & Walters, R. H., (1960, 1963) は「他入から肯定的な (positive) 注意をひきおこしたり、他人に面倒をみてもらうような反応をひきおこしたりすることのできる、反応のクラス」と定義し、Gewirtz, J. L. (1956) は「注意、是認、愛情、保証、近接などを含んだ肯定的な (positive) 社会的反応を他人から得ようとする行動である」としている。また、Sears, R. R. ら(1953) は、「助力や承認を求めていることが明らかであるような、学習によって獲得された動機づけ (motivation) の体系である」としている。

その他には、対人関係や意志決定の際のわく組みと規定しているもの (McCord, W. et al., 1962), Horney の苦情を訴えるパーソナリティ (complaint personality) または、人間に向かう動きをもつパーソナリティ (moving toward-people personality) を依存性をあらわしているとするもの (Zuckerman, M. et al., 1961)

* Dependency; empirical evidence and theoretical re-examination.

** by Keiko Eguchi (University of Tokyo)

などがある。

依存性の概念を問題にする際にとりあげられるのが、依存性の「動因」を認めるか、単に「行動傾向」とするか、の2つの立場の相違である。これは、「動因」が必要な構成概念であるかどうか、という今日の大きな問題に端を発しているわけであるが、ここでは、依存性についてしばって考えてみよう。

まず、依存性の動機的構成概念 (motivational construct) を認める人たちには、Sears, R. R., Beller, E. K., Heathers, G., Bandura, A., Walters, R. H. などがいる。この立場の人たちは、依存の動因を「単一の識別しうる動因 (unitary discriminable drive)」であるとし、第二次的動因であるという。かれらの表現を借りると「獲得された依存の動因 (acquired drive of dependency)」(Sears, R. R.), 「一般的な依存の動因 (general dependency drive)」(Beller, E. K.), 「情緒的依存 (emotional dependency)」(Heathers, G.) 「依存動因 (dependency drive)」(Bandura, A. & Walters, R. H.) などとなる。この立場の代表者ともいべき Sears, R. R. は「この考え方は、小さい子どもが親に注意・愛情・保証を求めることの自然発生的性格とその永続性、および養護や愛情をとり去ると依存の傾向がみかけ上強まり、かなりの量の養護が与えられるとそれへの傾向が低減するということからきている」としている (Sears, R. R. 1963)。

一方「動因」という概念を用いずに依存性を行動的構成概念 (behavioral construct) であるとしている人たちには、Karal, E., Hartup, W. W., Gewirtz, J. L. などがいる。この立場の人たちは「依存性とは、愛情を求める、助力を求める、注意をひくなどというような多くの異なった行動につけられるカテゴリーまたは見出し語である」としている。たとえば Gewirtz, J. L. は「依存行動とは、まえもって依存的な行動に対して与えられた強化と結合していた手がかりに対してのみ生ずるオペラントな活動である」として「動因」という概念を排除し、単に刺激と学習された反応だけで説明しようとしている (Sears, R. R., 1963)。

これはたしかに重要な問題であろう。Sears, R. R. がいうように現段階ではどちらが正しいともいえないものであろう (Sears, R. R., 1963)。けれども、どちらの立場をとっていても、実際になされている研究の資料はいずれも同じような行動 (overt behavior) の観察からきているものが大部分であり、また、依存性の操作的定義においても、2つの立場には差異が認められないことは注意すべきことであろう。つまり、現在までのところ

この大きな問題を解く手がかりはなく、単に問題意識にとどまっているといえよう。

2. 操作的定義：行動観察のわく組み

そこで以下では、動機的 (motivational) あるいは行動的 (behavioral) という立場の区別をせずに、現在までになされている研究において具体的にはどのようなものを依存性とよんでいるのか、その操作的定義をみてみよう。

従来の多くの研究が一致しているのは、次の8点である。

- ①身体的な接触を求める程度
- ②他人の近くにいること、他人とともにいることを求める程度
- ③他人から、言語的および物理的な助力を求める程度
- ④肯定的な (positive) しかたで注意を求める程度
- ⑤否定的な (negative) しかたで注意を求める程度
- ⑥保証を求める程度
- ⑦ことにのぞんだときの受身的な姿勢の程度
- ⑧安全を求め、冒険を避ける程度

ただし、この8点のうちの①～⑥の6点が特に多くの研究が一致しているものである。この6点は Sears, R. R. らの論文 (1953) が用いたものであり、それが依存要求または依存行動の指標としてほぼ踏襲されてきている。これらを用いている研究には、たとえば3～5才児を対象にした Beller, E. K. (1955), Heathers, G. (1955), Crandall, V. J. (1960), 2½～6½才児についての Marshall, H. R. (1961), 1～2才児に関する津守・稲毛 (1960) などの研究がある。なお、①～⑥に該当するものの他に⑦の受動的な姿勢をも用いているものには、Kagan, J. & Moss, H. A. (1960) の20余年間にわたる縦断的研究がある。これは、残された観察および面接資料の3～6才当時、6～10才当時の評定をする際の指標としたものである。また、⑧の安全を求め冒険を避けるなどをも用いているものには、4～7才児についての母親の報告の際の指標とした依田ら (1961), 成人を対象にした Kagan, J. & Moss, H. A. (1960) のものなどがある。

なお、この8点のうちのいくつかだけを依存性の指標としている場合もある。たとえば、Bandura, A. & Walters, R. H. (1960) は反社会的攻撃性を示す青年の研究において、②、③および⑥の3つだけを用いている。

3. 依存性の測定：テスト

依存性の測定のために用いられているテストには、主なものとして次のようなものがある。すなわち、Ed-

wards, A. L. の E P P S (1954) から 3 つの下位スケール、恭順 (deference), 求護 (succorance), 屈従 (abasement) を用いるもの、Navran, L. が M M P I の項目を用いて作成した依存性尺度 (Dy 尺度) (Navran, L., 1954) および T A T によるものである。

依存性の測定のために T A T を用いたのは, Kagan, J. & Mussen, P. H. (1956) が最初であり, その後の研究はかれらの分析方法を踏襲しているといっている。これは T A T 図版のうち 8 枚のカードを用いて集団法で反応を得ている。対象は 17~31 才の男子学生 27 名であり, 得られた物語りを次の 2 つの観点から分析した。まず, 主人公は課題の解決にあたって他人の助力を求めたか, そして第 2 に主人公は愛情や支えを喪失することを悩んでいたか, である。わが国においては井上ら (1963) がほぼ同様の方法で青年 (中学 1 年から大学 2 年) を対象に T A T を行ない, 助力, 援助, 世話, 保護, 接近, 接触, 支持, 激励などを指標に分析している。

ところでこれらの測定用具の妥当性はどうかであろうか。これらの妥当性の検討に相当する研究がいくつかある。

たとえば, E P P S の下位尺度については Bernardin, A. C. & Jessor, R. (1957) のものがある。かれらは, E P P S で学生 520 名から依存性が高いものと自立的であるもの各 55 名を選出し, (a) 他人に承認を求める傾向, (b) 他人に助力を求める傾向, (c) 他人への同調 (conformity) の傾向を実験的に調べたところ, (c) については両群に有意な差がないことを報告している。また, Gisvold, D. (1958) は自律の尺度 (autonomy) および恭順の尺度 (deference) と集団内同調性 (group conformity) との関係を見たところ, 自律とは有意な負の相関があったが, 恭順とは有意ではなかったとしている。しかし, Zuckerman, M. (1958) のように 3 つの下位尺度が, 権威に従うという意味での依存性を測定しているという報告もあり, 一致した見解には到達していない。

測定についての他の研究としては Zuckerman, M. ら (1961) のものがある。かれらは看護学校の学生を対象に, 数種の依存性尺度 (仲間間の他人評定, 自己評定, Navran の Dy 尺度, E P P S, S C T, T A T, ロールシャッパ) 間の併存的および概念的妥当性を検討している。そして, 依存性の測定のためには投影的なものは適当でないと示唆している。

依存性の発生

依存性がいかにして発生してくるかについては, 代表

的なものとして Sears, R. R. の説明がある。

Sears, R. R. は Hull, C. L. の流れをくむ人であり伝統的な S—R の図式——つまり, ある手がかりや動因刺激に直面すると, 主体は道具的行為によって環境に働きかけ, 目標反応をし, 動因刺激を解消する——を用いている。そして Sears, R. R. の特徴はこの目標反応に導く道具的行為が社会的な文脈においては, しばしば他人の行為であることを指摘している点である (Hall, C. S. & Lindzey, G., 1957)。

たとえば, 母親が泣いている赤ん坊を抱きあげてあやし, その結果赤ん坊が笑う, という場合を考えてみよう。

この行動をまず母親の側からみるとこの母親は泣いている赤ん坊に直面し, 赤ん坊を笑わせたいという動因刺激を解消させるために, 赤ん坊を抱きあげてあやすという道具的行為をする, ということになる。ところが, この同じ状況を赤ん坊の側からみてみると, 上記の母親の行為は子どもの行動の系列に密接に結びついている。つまり, 抱いてもらいたいという要求が母親の行為によって解消されているのである。

Sears, R. R. はこのような状況を二者関係の状況 (dyadic situation) とよんでいるのであるが, これはある人の行動が機能的に他人の反応と結合していることをさす。ここで注意すべきことは, この二者関係状況においては, 他人の行動が単に道具的行為として行動の系列に入っているだけではなく, それが要求や手がかり状況 (cue situation) の本質的な部分にまでなっているということを強調する点である。

以上のようなわけで, 赤ん坊とその世話をするおとな (母親) とはもっとも基本的な二者関係の単位をだんだんに形成していくことになる。すなわち, 生理的要求 (第一次的要求) を充たすという点でまったく無力な赤ん坊は, おなかがすいたと泣いて母親に訴える。母親はお乳を飲ませて赤ん坊の生理的要求を充たすのであるが, その際に, 抱きあげたり, 笑いかけたり, 「よしよし, いい子ね」などと声をかけたり, 軽く背をたたいてやったりという愛情の表現をしている。つまり, ふつう赤ん坊はお乳をもらうと同時に愛撫されていることになる。このように第一次的要求の解消と母親の愛情の表現とが絶えずつながって生起していると, 付随物にすぎなかった母親の愛情が第一次要求の動因刺激と同様の動因刺激になってくる。つまり, 第二次的要求が獲得されるのである。

こうして母親と赤ん坊とはだんだんに二者関係を形成していくのであるが, この関係においては成員が, 期待

されている方法でいつもの役割を果たしたときにのみ充足される。したがって、赤ん坊は二者関係の形成過程で、母親に「いつもの」役割を果たすように要求することを学習していることになる。この要求を依存性、依存要求、依存動因などよぶのである。

このような過程を経て獲得されるために、依存性は母親の強化の方法、内容および子どもの期待に応じない場合に生じる欲求不満の関数であるとされる (Hall, C. S. & Lindzey, G., 1957; Sears, R. R. et al., 1957; Sears, R. R., 1963)。そしてそのために依存性は乳幼児期の強化や欲求不満の程度——しつけにおける賞、罰、許容度などの程度——との関係において最も問題にされることが多いのである。

そこで、この理論にもとづく依存性の規定条件の研究をみてみよう。

依存性の強さを規定する条件としては、ほぼ次の2点が考えられている。まず第1に、依存行動に対するおとな(母親)の強化である。これは依存的な行動をおとなが受容し承認すれば、それが賞の役割りを果たしてその行動が強化されるというものである。第2は、要求不満の程度が問題にされる。つまり、おとなが依存の要求を拒否したり、罰を与えたりして依存の要求が満たされずにある程度の要求不満を生ぜしめると、要求が強まるからである。

この2つの規定条件については前述のように Sears, R. R. が依存性の発生の説明の際に考えていたことであり、じじつ、1953年の論文でもこの点が検討されているし、その後も研究の中心的な主題のひとつになっている。

主なものとしては、まず Sears, R. R. ら (1953) の研究がある。かれらは就学前児40名について依存要求と要求不満との間に正の相関があることを示そうとしている。その結果、授乳のさいの要求不満(時間授乳と急激な離乳)と依存性との相関は正ではあるが、現在の養護の欠乏(就寝時の接触度、母親が多忙な際にどの程度子どもを受容するかなど)との相関は、男子については正であるが女子については負であるという性差が報告されている。また、母親が依存要求に対して罰を与えたり拒否したりすると、依存要求は男子では増加するが女子では逆に減少することが認められ、ここでも性差が指摘されている。次に Stendler, C. B. (1952) は過依存(over-dependency)がどのようにして生じるかを分析し、単に過保護だけが原因ではないとする。かれは依存性の発達における2つの危機(1才の末期と2~3才)を指摘し、この時期におこりやすい不安を解消するため

に過依存がおこる、としている。すなわち、1才末期の危機とは赤ん坊が母親に依存してもいいかどうかを試しはじめる時期であり、2~3才とはそれまでの依存のしかたを変えるようにという社会的要求が急激に強まる時期であるという。

規定条件についての実験的研究としては、Gewirtz, J. L. (1956) および Hartup, W. W. (1958) がある。

Gewirtz, J. L. は4~5才児を対象に、おとなのいる部屋であきていやになるまで絵を描くという実験場面をつくり、おとなが子どもの要求に応ずる度合いが大であると子どもが注意をひく度合いは小であるが、逆に前者が小であると後者は大になることを報告している。そして Hartup, W. W. は3~5才児について実験的に終始実験者に養護を与えられている群と、途中で養護を中止される群の2種をつくり、後に積木遊びなどの課題をさせたところ、女兒についてのみ養護を中止された群の方が作業がじょうずであるという傾向がみられた。つまり、おとなの注意をひきたいために作業量が増加するとしており、少なくとも女兒については実験的に前述の規定条件を確認する結果を示している。が、津守・稲毛(1960)は2;3~3;8才児39名の母親に面接調査を行ない、依存性が高いものの中にも依存行動が強化されるために依存度が大になるもの、および逆に依存の要求に罰が与えられたために大になるもの、の2種があり、これらは質的に異なるであろうと指摘して規定条件を検討してみる必要があるとしている。

Sears, R. R. も1963年の文献においては前記の2つを規定条件として引出すことはできず、父親のしつけにおける役割、女子に対する成熟した行動についての要求度、攻撃抑制の厳しさなどを依存性を助長する変数として消極的にはあるがあげている。また、Finney, J. C. (1961) は5~16才の少年および母親を対象にして、子どものパーソナリティに及ぼす母親の影響について報告しているが、そのなかで依存性と関連のある母親の態度としては、依存性に対する選択的な賞、過保護、子どもの自立的な成熟に対して賞を与えるという意味での母親の成就欲求をあげている。

ところで、このような意味での依存の行動が生後何か月ぐらいであらわれるかについてはいくつかの報告がある。たとえば Sears, R. R. ら (1957) は生後6か月になると母親が近づいてくると両手を差出して抱いてほしいような身ぶりをすることをすでに学習していると報告しているし、また、わが国においても津守・稲毛(1961)によれば、生後3か月になると泣いているときに人が来ると泣きやむ、7か月には部屋にだれもいなくなると泣

きだす、8か月には母親の姿が見えなくなるとのぞきこんでさがす、などの行動がみられるとされている。

発生についての他の理論としては、精神分析の主として口唇的依存に関連したものがある。が、これらはまだ単なる記述にとどまっていて、厳密な観察や実験はない。

このように依存性の発生に関する理論は、いまのところ Sears, R. R. 一派のものが有力なものである。そしてそれに関する実証的な研究も多い。しかし実証的研究はすでに獲得された依存性と現在の親の態度との関連を問題にし間接的に発生に触れる程度で、厳密な意味でその発生の過程を扱った研究はないといわなければならない。Schaffer, H. R. & Emerson, P. E. (1964) は従来の研究では対象児が大きすぎるために発生について明確にできないのだ、と指摘している。乳幼児期は動物から人間への類推がかなり許される唯一の時期でもあることを考えれば、発生についての動物心理学的な研究も困難ではないと思われる。今後の研究が期待されよう。

成長に伴う依存性の変容

子どもが成長するにつれて依存性がどのように変化していくかは大変興味深い問題であるが、現在までの研究では積極的にこれを取りあげたものは非常に少ない。

依存性の変化の内容としては、依存傾向の表出方法——依存のしかた——と依存する対象および依存傾向の強さの3点が考えられよう。

1. 依存のしかたの変化

まず依存のしかたとしては Beller, E. K. (1955) による5段階の現われかたについての考察がある。すなわち、第1段階でみられる依存行動は身体的接触を求めることであるが、やがて、運動的な機能が発達してくると、近くにおとながいることが身体的接触と同じ価値を持つようになってくる。これが第2段階の近接を求めるという現われかたであるという。そして第3段階はおとなに注目してほしいというかたちで現れてくる。次に、なんでも自分でしたいと思う時期がくると第4段階の助力を求めるという現われかたをする。つまり、自分でしたいという気持を大切にしてもらいながら手伝ってもらい、ということである。最後におおよそ自分が自分でできるようになると、承認、賛同を得るだけで満足する第5段階に到る、というものである。Beller, E. K. はこのようにして現われてくる5つが依存要求の構成分子であるとしている。しかしこれは依存性の操作的概念としての5つの構成分子の出現の説明におわっていて、これらがその後成長につれてどのように変化していくのか

については触れていない。依存のしかたの変化については Sears, R. R. (1963) はおおよそにはあるが、依存性が未成熟な形式から成熟した形式へと変化することを指摘している。同じことを受身的依存から能動的依存へ、身体的依存から言語的依存へとも表現しているが、前者に属するものには「身体的接触を求める」とか「近接を求める」などを考え、後者としては「承認を求める」などを考えている。

2. 依存する対象の変化

依存の対象の変化に主眼をおいた研究に Heathers, G., Marshall, H. R., Kagan, J. & Moss, A. H. の研究がある。

Heathers, G. (1955) は社会化の過程には依存が初めは両親やおとなに向けられていたのが、しだいに仲間に向けられていくという変化が含まれているとしている。そして、「おかあさん子」というのはこの移行がスムーズに行なわれていない子どもでもあるし、おとなが自立的だと考えている子どもは、かれの依存傾向をすでに仲間に向けているだけのことでありという考えから、2才児および4.5才児の行動を観察している。その結果、教師に対する身体的接触や愛情の要求は、4.5才児では2才児の5分の1に減少するが、仲間に対してのそれは兩年令間に差異がないこと、また、教師に対して注意を求めたり、承認を求めたりすることは、4.5才児になっても変化はないが、仲間に対するそれは2才児の3倍にもなることが指摘され、仮説がほぼ支持されている。また、Marshall, H. R. (1961) は2.5才～6.5才の子どもを対象にした保母による行動観察の結果から、2.5才から4.5才にいたる間に保母への依存行動は減少してはいるが6.5才においてもなお残っていることを報告している。

これらは幼児を対象にしたものであるが、もっと年長の対象についての研究には Kagan, J. & Moss, A. H. (1960) のものがある。かれらは縦断的な研究の際に、幼児、児童期における依存の対象としては母親や女性のおとなを考えているが、成人期においては愛情の対象 (love object) や権威などをも含めて問題にしている。

3. 依存要求の変化

成長に伴う依存の要求の質的、構造的な変化についての研究は、大部分の研究者が成長につれて依存性が減少していくという立場にはじめから立っていること、また、かなり狭い年齢範囲において、むしろその個人差を問題にすることが多いからであろうが、いたって少ない。やや趣きの異なる研究としては前記の Kagan, J. & Moss, A. H. (1960) のものがある。かれらは縦断的

な豊富な資料を用いて幼児期から成人期間の依存行動の安定性 (stability) をみている。これによると、少なくとも女性においては安定性が認められること、3～6才時の依存行動よりも、6～10才時のそれの方が成人期の依存行動と関係があること、が報告されている。

このような依存性の変容の過程の解明は、そのまま人間の依存から自立への発達の過程の解明である。しかし、従来の研究のされ方には重大な欠陥がある。それは、個々の研究が多くは前述の3つのうちのひとつの要因しか扱っていないことである。依存性の変容において大切なことは、どのような対象に、どのようなしかたで、どの程度依存しているか、ということである。多くの研究の報告を総覧すると、依存性の研究では少なくともこれら3要因の関係の解明の必要性が痛感される。幼児が母親に依存していることは多くの認めるところである。しかし、青年期の研究によれば青年は権威に依存しているが、母親にもなお依存しているという。このような事実を解明するためには、従来のように単に母親への依存が成長につれて減少していくことを示したり、全体的な依存量の減少を示したりしてもはじまらないであろう。ここで必要なことは、幼児と青年における、依存の対象としての母親の性質および、依存のしかたの相違、青年における個々の依存の対象の性質などの解明であろう。

われわれはこのような意味での依存性の発達の變容を問題にしている (江口, 1963, 1964, 1965)。詳細は別の機会に報告するが、それらによると、精神的な支えを求めるという意味での依存の要求は、幼児から青年を通して存在するが、その発現方法が変化しているという仮説を得た。すなわち、幼児期においては比較的限定された対象に幼いしかたで依存しそのような要求を充たしているが、成長につれて要求の充たしかたが変化していく。青年では限られてはいるが幼児に比較すればずっと多くの依存の対象を持っており、身近な対象には幼いしかたで依存しているが、遠い存在のものには社会的に承認されたしかた、ときには間接的なしかたで依存しているというようにである。このように依存性の発達の變容の研究においては、幼児から青年にいたる間の依存の要求を充たすという意味での機能的連続性を認めたうえで、その依存の構造や内容の変化をとらえる、という迫りかたの方が生産的であると考え。この点については討論でさらにふれたい。

その他の依存性の研究

1. 依存性と自立性 (independence)

常識的に依存の反対が自立と考えられていたり、発達のみにみると人間は依存的でなくなって自立的になっていくとされている。が、この2つは現在までの結果では両極概念ではないとされている。

たとえば Beller, E. K. (1955) は3～5才の幼児の行動観察にもとづいて、依存性と自立性の相関をとったところ、 $r = -0.53$ で、「両者はネガティブではあるが逆の関係ではない」としている。また、Heathers, G. (1955) も2～5才児の行動を評定すると、依存性と自立性の各5つの構成分子の組み合わせはあるものは正だがあるものは負の相関というように一貫性がなく、両者は同じ次元で比較できないものとしている。そして、日本における研究では、津守・稲毛 (1960) がある。かれらも1～2才の幼児とその母親の実験場面の観察から、両者の相関を $r = -0.596$ と算出している。

これらの結果は一般的な用語法とは反するかのように見える。人間の発達是一面では依存から自立へとされているのに、なぜこれらは両極概念ではないのであろうか。この点を究明するために、まず、これらの研究での自立性の定義からみることにしよう。

前述のように依存性は受動的な行動傾向または要求とされるのに対して、自立性は積極的、能動的なものとされている。

たとえば Beller, E. K. (1955) は、幼児の行動観察の際の自立性の指標として、(1)イニシャティヴをとること、(2)障害を克服すること、(3)ものに固執すること、(4)物事をなすことを望むこと、(5)自分で物事をする、とし、Heathers, G. (1955) は同じく行動観察の指標として、(1)保母からの刺激を無視する、(2)他の子どもからの刺激を無視する、(3)ひとりで一生懸命遊ぶ、(4)遊びを構成する、(5)他の子どもの遊びを妨害する、(6)他の子どもの妨害や攻撃に対抗するなどを用いている。また、津守・稲毛 (1960) は、(1)あそびや仕事から満足を得ること、(2)生活習慣をひとりですること、(3)障害を克服すること、(4)自発的にすること、(5)仕事をおわりまで完成させること、としている。

つまり、われわれの問題にする自立性とは「依存していないこと」以上のものであり、また、種々の生活習慣がひとりでできることだけを指すものでもない。すなわち、自立とは「依存していない」ばかりか、積極的に仕事 (子どもの場合には遊び) にうちこみ、自信を持ち、自己を主張でき自己の立場を確立することといえよう。霜山 (1964) の定義はこれをよく表わしていよう。「(自主性とは)「倫理的自由」による行動の自律をいうのであり、意志の統御機能による自制、克己、勇気、忍耐、

独立・自信・節度などによばれる特性を帯びた能動的な決断が、それぞれの課題状況において適切に自由になされることを意味している」。

依存性と自立性とは二極概念ではないということについて、これらの研究では「依存傾向を生むような親の態度は、一方では自立性の成長を助けもする」と説明している。しかし、この点での実証的研究はなされていない。これはひとつには依存性についての研究に比べ、自立性に関する研究がほとんどなされていないことにもよるであろう。依存性の研究においては、この依存と自立の関係の解明が問題を解くひとつの鍵になるように思われる。

2. 臨床場面における依存性

ここでの研究はまだ少ないが、作業仮説としては「来談当初は依存的であるクライアントが問題の解消とともに依存的ではなくなる」というものが一般的である。たとえば、Snyder, W. U. (1963) は、この方向で事例の分析を試みている。

3. 依存の不安 (dependency anxiety)

このことばは Bandura, A. & Walters, R. H. (1960) が案出したものである。かれらは、反社会的な攻撃行動を示す少年の中には、他人との安定した依存的・情緒的きずなの形成や維持ができないで対人関係において無関心をよそおっているものがあり、しかもこれらの少年たちには、施設児のように依存的関係を経験していない場合、および依存要求に対する要求不満を持っている、あるいは依存することを罰せられている場合の2種があることを発見している。そして Bandura, A. らは、このように依存することに対して不安を感じ、その結果、依存の要求を抑えているような場合を依存の不安とよんでいる。かれらによれば、依存行動は依存要求の強さと依存の不安の強さとの関数になる。

4. 依存性とその他の人格特性

Crandall, V. J. ら (1960) によれば3～5才児の行動観察の結果、達成行動 (achievement effort) と依存行動とはわずかではあるが逆相関の関係がある(−.32～−.11) ことが報告され (Winterbottom, M. R. (1958) も8才男児についてみたところ達成動機 (achievement motive) の高いものは、依存的ではないと教師により評定されたとしている。

Marshall, H. R. & MaCandless, B. R. (1957) によれば、おとなに依存的な子どもは社会的な地位や社会的参加度が低いことが報告されている。

また、Hartup, W. W. & Keller, E. D. (1960) は依存の要求と養護の要求——愛情、注意、保証、保護など

を与える——との関係をみて、この2つは共通の動機づけによると考えている。

依存性と攻撃性とは Sears, R. R. ら (1953) 以来パーソナリティを記述する際の重要な変数として同時に問題にされることが多い。外国においては反社会的少年を対象にした Bandura, A. & Walters, R. H. (1963) のものなどがあり、わが国においては前述のように津守・稲毛 (1961)、井上ら (1963) などがある。

その他の特性としては従順性との関連を扱った津守・稲毛 (1960) がある。かれらは従順性の大小は依存度の大小にかかわらず、罰の厳しさと依存行動に対する親の許容度とに関連していることを報告している。すなわち、許容度が大であると従順性が大であるという関係がある。

そしてまた、Crowne, D. P. & Marlowe, D. (1964) は、依存的な人の特性として防衛的傾向の強さを指摘している。かれらによれば他人の是認 (approval) に依存している人間は、傷つきやすい自尊心を持っている。そのためにその弱い自尊心を守るために他人の思惑を気にしたり、他人に対する敵意を抑圧したりという、いわばよろいを着ているとされる。

5. 依存性と同調性

依存的な傾向が強いものは社会的な動きに同調しやすく、暗示を受けやすいということが問題にされている。

Kagan, J. & Mussen, P. H. (1956) はTATで測定した依存性と Asch, S. E. (1952) の方法による集団内同調性 (group conformity) の関係を27名の男子大学生についてみたところ、依存性の高いものの方が同調の傾向が高いとしている。Jakubczak, L. F. & Walters, R. H. (1959) は被暗示性は依存性のひとつの形式であるという仮説を持ち、9才の男児60名から、ひとりのできるのにおとなの助けを借りたがる依存度の高いものと、できないのに手助けを断わる依存度の低いもの各12名を選出し、これに対して上記の Asch, S. E. の方法による知覚実験を行なった。その結果依存度の高い群の方が暗示にかかりやすいことから、被暗示性がたしかに依存性のひとつの現われであると結論している。

また、Linton, H. B. (1955) は外的影響に対する依存性を問題にして Witkin, H. A. の方法で測定した知覚の場-依存行動 (field-dependent perceptual behavior) が、同調性テスト (自動運動的なものと、態度の変化をみるもの) と正の相関があることを示している。対象は男子大学生53名である。

Crowne, D. P. & Marlowe, D. (1964) はパーソナリティ・インベントリーにおける社会的要求性 (social

desirability) は一般的な承認の要求 (need-for-approval) の現われであることを指摘した。そしてかれらの作成した M-C 尺度 (Marlowe-Crowne Social-Desirability Scale) で測定した承認の要求の高いものと低いものの2群に対して種々の実験を大学生を対象に行なっている。その結果次のようなことを指摘している。承認の要求の高いものは低いものに比べ、(a) 言語的条件づけ状況において実験者の強化をより受けやすい、すなわち肯定的な賞に対しては低いものよりも課題を多く行なうが、否定的な賞は承認を拒否されたと認知するのでこの場合には低いものよりも遂行状態が悪くなる、(b) より高い社会的同調性を示す、(c) 常識的なありきたりの基準に固執している、(d) 説得されやすい。

以上はいずれも依存性と同調性の正の相関関係を示しているのであるが、これを否定するような結果も報告されている。たとえば前述のように Bernardin, A. C. ら (1957) は E P P S (Edwards, A. L., 1954) で依存傾向が高いとされた学生が必ずしも Asch, S. E. (1952) 式の実験では集団内同調性の傾向を示してはいないとしているし、Gisvold, D. (1958) も E P P S の下位尺度の恭順 (deference) について同様の報告をしている。また、中村 (1964) は Witkin, H. A. による場-依存と集団内同調性 (質問紙による同調性テスト) とは逆の相関関係を示したとしている。

やや異なった結果としては山本 (1965) によるものがある。かれは依存性の高いもの (Witkin, H. A. の定義によって作成された質問紙により測定) の中には、同調性が高いものと、逆に反抗的になり極端な非同調性を示す反同調 (counterformity) のものがあることを実験的に示し、Kretch, D. の仮説を検討している。

これらの研究においては依存性や同調性の測定法や実験方法が異なるために、同一の次元で比較できないのではあるが、両者の関連は依存性の問題として興味深い。

これらはいずれも実験的な研究であるが、社会的現象を記述したものに Fromm, E. (1941, 1947) のいう市場的性格や、Riesman, D. (1953) のいう他人志向型の人間などが考えられる。権威を絶対とみ、権威に動かされていく人間やひとつのグループに所属し自分の外のものから方向づけられていく人間などは、権威に依存し、グループに依存している人間のひとつの姿であろう。

6. 社会的学習における依存性の役割

同一視、模倣、偶然的学習などの、いわゆる社会的学習をおこりやすくさせるという依存性の心理学的特質が指摘されている。Sears, R. R. et al. (1965) によれば「依存性は模倣行動強化の主要な源泉である」。したがっ

て、「依存性が強ければ同一視はおこりやすく、依存性が欠如していると同一視は発達しない」ということになる。これを支持する実証的研究はかなり多い。たとえば、Sears, P. (1953) によれば、父親の愛情に充たされている5才の男児はドル・プレイ場面で父親の役割をとることが報告されている。また、Payne, D. E. & Mussen, P. H. (1956) ではこのような関係にある父親と高校生は、カリフォルニア心理検査で類似性を示したし、Mussen, P. H. & Distler, C. H. (1959) によれば、父親と愛情関係にある5才の子どもは、そうでない子どもに比べドル・プレイ場面においてより多く男性的行動を示したとされている。

そして Bandura, A. & Huston, A. C. (1961) はこのような結果を実験的に確かめた。すなわち、実験者と養護関係をもっている子どもは、そうでない子どもに比べ実験者をモデルとする偶然的学習をする度合いが大であることを示したのである。そしてさらにかれらは、ひき続いて養護が与えられている場合には依存性は模倣と本質的に関係してくることはないが、養護が中止されると依存性は模倣を促進する重要な変数となるであろう、と指摘している。

このようにこの分野で扱われる変数やその相関関係は、人格発達の社会的学習理論による説明において特に重要になってきており、今後の研究の発展が期待される。

7. 依存性の社会的規定因

最後に依存性を規定している社会的要因についてみることにしよう。現在のところこの種の研究は少ない。まず社会・文化に規定されて現われていると思われるのが依存性における性差である。

依存性においてはいくつかの性差がみられることは前に述べたとおりである。それは、規定条件の作用のしかたにも (たとえば Sears, R. R. et al. 1953), 全体的な依存量の多少にも (Sears, R. R. et al. 1953), また、依存傾向の安定性についても (Kagan, J. et al. 1960), 構成分子間の相関の相違にも (Kagan, J., et al. 1960) 認められた。これについては2つの理由が考えられている。ひとつは、女子の方が母親との同一視が強いために男子よりも母親の罰を強く感じるということ、そして他は、社会的に女子においては依存性が肯定されているために禁止されることが男子よりも少ないということ、である。Sears, R. R. (1963) も性差については社会的な要因を重視し、「女子においては依存的な行動は前進的 (progressive) であるが男子では退行的とされる」としている。

また、子どものおかれた環境と依存性との関連をみた

ものに依田ら(1961)のものがある。かれらは、特別に作成した22項目からなる依存性尺度の得点と、家族構成、経済状況、文化状況、日常生活状況などとの関係をみている。なお、対象は4;8~6;7才の幼児の母親360名である。その結果によると、居住条件、経済条件、文化的な背景は幼児の依存性と特には関係していないが、幼児の自立性を養うためには、幼児のための独立した行動空間(たとえば子ども部屋があること、自分で使えるこづかいが与えられていることなど)が必要であることを示唆している。また、家族構成からみると長子が依存的で中間子と末子は依存性が弱い傾向がみられ、きょうだい数が増すほど依存的でなくなる傾向も示されている。

この他にこの種の研究としては、地域や階層による相違についての研究や、文化人類学的な研究が考えられようが、Whiting, W. M. & Child, I. L. (1953)を除けばほとんどなされていないのが現状である。かれらによれば、幼児期における依存要求を拒否され罰せられている文化社会での成人は、そうでない社会のものに比べ依存の不安が強いことが報告されている。なお、土居(1961)による日本人の「甘え」などもこの領域の研究として興味深いと思われる。

依存性概念の再検討

われわれは過去および現在において、どのような文脈のなかで依存性が問題にされているかの概略をみてきた。個々の研究はここ10余年間にそれなりに高度に洗練されてきている。しかし、依然解明されない多くの問題や矛盾が含まれていることも否定できない。

たとえば、依存性と自立性とが両極概念でないのはなぜか、依存性から自立性への発達の過程はどのようなものか、幼児の依存性と青年の依存性の相違は何か、健康な青年でも依存しているのはどう説明されるのか、いわゆる依存的な子どもはどのように指導すべきか、など多くの問題が解明されないままに残されている。

従来の研究のこのようなゆき詰まりの原因のひとつは、幼児期と青年期の研究が不連続なままになされていること、せまい年令範囲の個人差の研究に主眼がおかれていること、などの実際的なことにもよろうが、ここでの根本的な問題は何を依存性とよぶか、依存性をどのような概念とするか、にあると思われる。

現在広く用いられている依存性とは「幼児的な傾向で成長につれて減少していくもの」である。したがって幼児期を脱してもなお「依存的」であることは、一種の退行的な現象として問題視される。そして、依存的でなく

なっていくことがただちに自立性が獲得されていくことだとされ、教育においては自立性の確立が主要な関心となっている。そして一方では、社会的動物である人間が相互「依存している」ことが広く認められており、相互依存の状態に身をおけることは、しばしばよく社会化されていることとみなされている。しかし、このような意味での「依存している」状態は依存性のなかには含めない。すなわち、「依存的」と「依存している」ことは質的に不連続とされ、退行的な意味の依存性が、望ましいとされる自立性に対立するものとして問題にされてきた。そして、社会化されている状態である「依存している」状態と、同じく社会化された望ましい人格には欠くことのできない自立性とを、同時に統一的に注目することはほとんどない。

しかし、まったく無力な状態で生まれ、生後6か月前後にして依存要求を獲得し、その後も相互依存的な社会生活を営む人間にとって、依存要求、依存傾向とはどのような性質のものと考えらるべきか。

健康な青年においてもなお依存性が認められること、不適応状態にある人間では、従来問題にされてきたように依存的なものと同時に、依存要求が欠如しているものも多いこと(Bandura, A. & Walters, P. H. 1960; 水島, 1963; 池見, 1965)、依存的な子どもの依存性を禁止するとなお一層依存的になったこと、などの報告は「依存的」、「依存している」、「自立性」の3つがけして不連続ではないことを示唆していよう。

そこでわれわれは、依存性の概念を拡大して「依存的」も「依存している」も、ともに依存性のなかを含めて考えることを提案したい。そしてまた、自立性をも依存性のひとつの状態として説明しようとするのである。つまり、依存性とは人間にとって本質的な傾向であり、精神的な支えを求めるというその機能は生涯人間につきまとうものである、と考えられる。ただ依存の対象(数や分化、中心化の度合い)や依存のしかた(mode)において異なるのみだ、と考える。すなわち、この依存性のなかには大きくわければ次の3つの状態が予想される。第1が従来のいわゆる「依存的」な状態、第2が適度に依存している状態、つまり自立性の獲得されていく状態(青年期では自立している状態)である。そして第3は依存要求の欠如している状態である。

われわれの主張する依存性概念の拡大は、単なることばのいいかえだけではない。何を「依存性」とよぶかはある意味では自由である。したがってこの点だけからすれば従来一般に承認されている語の用法をくつがえす根拠はないといえよう。しかし、いわゆる「依存性」が幼

見的な特性であるとしても、それがしだいに消去あるいは抑制されていくとみるか、むしろ一層発達していく過程で自立性が生じ、また、依存動因にもとづいて社会的行動の学習がはじめて可能になるとみるかは、依存性の心理学的特質に関する不一致なのである。われわれはこの後者のような見解を強調するために、依存性概念の拡大を主張するのである。さらに以下でこの立場のいくつかの利点を考えてみよう。

(1) 依存性の発達の変容

この立場の利点のひとつは、依存性の発達変容の過程を積極的にとりあげられることである。さきに述べたように、依存性の変容についての研究は、消失していくべきものとして扱っているかぎり、得られた興味深い結果からも生産的な知見は得られない。われわれの立場にたてば、従来の研究での個々ばらばらの報告も、依存の対象の拡大過程、依存のしかたの変化の過程、などの依存性の発達の變容の過程として統合できよう。われわれはこのような立場からの実証的研究をすすめている。ここで得られた資料からもっともらしいと考えられる説明は、依存性がいちおう発達の終点にあると思われる青年の依存のしかたは、幼児のそれとは機能的には同一であるがその内容が異なっている、というものである。かれらは幾人かの限られたものを依存の対象としており、それぞれの対象が各個人においてそれぞれの役割を与えられている。すなわち、もっとも支えの中核となっているもの、やや中核的なもの、ずっと道具的色彩の増したもの、という具合にである。われわれはこのような青年における依存の対象の組織された体系ともいふべきものを「依存構造」とよぼうと思う。そして、依存性の発達の變容過程を「依存構造」というモデルを用いて解明しようとしている（三木ほか、1964、江口、1963、1964、1965）。

(2) 依存性と自立性

人間の発達がある意味では依存から自立への発達の過程であることを否定するものはないであろう。従来の研究では依存性が自立性にとってかわられていくとする一方では、自立性とは依存していないこと以上のものであることが認められ、依存性と自立性とは両極概念ではないことが報告されている。しかし、なぜ、どのようにして依存から自立へと発達していくかについての知見はなんら得られていない。

この問題が解明されないのは依存性が縦断的に研究されることがなかったり、自立性についての研究がないがしろにされていること、などに直接的にはよろうが、根本的なものはここでも依存性の概念規定の問題である。依存から自立への発達の様相をみるためには、ぜひ依存

性の変容していく過程が解明される必要がある。そのためには両者の共通性を説明しうのような広いカテゴリーが必要で前述のように依存性を広く定義しておかなくてはならない。

われわれは依存性の発達変容の過程が自立性の発達過程であると考えている。すなわち、依存の対象が拡大し、確固たる「依存構造」が形成されていく過程こそ、相対的に真の柔軟な自立性が獲得されていく過程であると考えている方が得るところが多い。

真の柔軟な自立性とはいわゆる頑固一徹というのとは異なる。それはなにものをも受けいれないという「自立」ではなく、外からの刺激を受けいれることができ、しかもその刺激に直接的に影響されずに自己の立場からの反応ができるということである。このような反応ができるためには外からの刺激を受けとめるクッションを持っているなくてはならない。より能動的に表現すれば、さまざまな対人行動を位置づけるわく組みともいふべきものである。柔軟な自立性とはこのわく組みの質にかかっている。つまり、このわく組みがどの程度確立しているか、どれほど能動的であるか、フレキシブルであるかなどにである。そしてわれわれは、これらのわく組みは依存の結果できあがるものと考えている。幼児のわく組みは母親である。青年のそれは多くの対象を持った構造をなしている。したがって、母親の言だけ、友人の言だけに左右されることはない。それはまた、価値や信念という形になっていることもあろう。おそらくこうした自立性を支えているわく組みは、さまざまな対象への依存が内化され協調されていく過程で生じてきたものであろう。すなわち、自立性とは依存性の発達変容を通して獲得されるものと考えられる。それは、さまざまな対象への中心化を積み重ね、脱中心をしていくという過程にほかならない。

(3) 依存性に関する問題行動の治療

依存性の観点からの問題行動には大きく分けて2種類が考えられる。第1は、いわゆる依存的な場合である。だれに対しても依存的な子ども、母親にいつもまつわりついて友人と遊べない子どもなどである。第2は、あまりにも依存傾向が欠如している場合である。この典型的なものには自閉的な孤立児がある。従来の研究は第1の場合のみを依存性の問題として扱っていたし、その治療は期待されるほど効果をあげてはいない。

われわれの立場の第3の利点は、これらの逸脱した依存行動をも理論の中に含められるところにある。すなわち、依存性の望ましい発達、適度の依存性を考え、そこからみての逸脱した場合として、過度に依存的であるよ

うな第1のもの、逆に、依存傾向が欠如している第2のもの、という具合にである。そしてわれわれは、依存性の望ましい発達の過程をおさえることによって、すなわち、依存の対象やしかた(mode)を変化させる、あるいは適当な依存の対象を用意してやる、というように、これらの逸脱した事例をどのようにしたらよいかの、(少なくとも従来よりは)具体的な方向・方法についての知見が得られよう。

〈付記〉 これは、昭和39年度・東京大学に修士論文として提出したものの一部に加筆したものである。論文作成にあたっては、依田新教授、三木安正教授、波多野諄余夫助手および教育心理学研究室の久原恵子氏からご指導を賜り、心から感謝するものである。

また、本稿をまとめるにあたっては、波多野助手から貴重なご示唆をいただいた。心からお礼申しあげる。

文 献

- Antonovsky, H. F. 1959 A contribution to research in the area of mother-child relationships. *Child Developm.*, 30, 37-51.
- Asch, S. E. 1952 *Social psychology*. Prentice Hall.
- Bandura, A. & Walters, R. H. 1960 *Adolescent aggression*. Ronald.
- Bandura, A. & Huston, A. C. 1961 Identification as a process of incidental learning. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 63, 311-318.
- Bandura, A. & Walters, R. H. 1963 *Social learning and personality development*. Holt.
- Beller, E. K. 1955 Dependency and independence in young children. *J. Genet. Psychol.*, 87, 25-35.
- Beller, E. K. 1957 Dependency and autonomous achievement-striving related to orality and anality in early childhood. *Child Developm.*, 28, 287-315.
- Berkowitz, L. & Daniels, L. R. 1963 Responsibility and dependency. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 66, 429-436.
- Bernardin, A. C. & Jessor, R. 1957 A construct validation of the EPPS with respect to dependency. *J. consult. Psychol.*, 21, 63-67.
- Bühler, Ch. 1962 *Values of psychotherapy*. Free Press.
- Cairns, R. B. & Lewis, M. 1962 Dependency and the reinforcement value of a verbal stimulus. *J. consult. Psychol.*, 26, 1-8.
- Crandall, V. J. et al. 1958 The development of social compliance in young children. *Child Developm.*, 29, 429-443.
- Crandall, V. J., et al. 1960 Maternal reactions and the development of independence and achievement behavior in young children. *Child Developm.*, 31, 243-251.
- Crandall, V. J. 1962 Achievement. in *62 NSSE Yearbook: Child Psychology*. 416-459.
- Crowne, D. P. & Marlowe, D. 1960 A new scale of social desirability independence of psychopathology. *J. consult. Psychol.*, 24, 349-354.
- Crowne, D. P. & Marlowe, D. 1964 *The approval motive: Studies in evaluative dependence*. Wiley.
- Dahlstrom, W. G. & Welsh, G. S. 1963 *An MMPI handbook*. Univ. of Minnesota Press.
- Daniels, L.R. & Berkowitz, L. 1963 Liking and response to dependency relationship. *Human Relations*, 16, 141-148.
- 土居健郎 1961 性格の精神力学 依田新他編：性格の理論 金子書房 106-126.
- Debesse, M. L'Adolescence 1946 Univer. de France (吉倉訳 青年期, 白水社. 1956)
- Edwards, A. L. 1954 *Manual for the Edwards Personal Preference Schedule*. Psychol. Corp.
- 江口恵子 1963 児童の依存性とその発達の変容 日本教育心理学会第5回総会
- 江口恵子 1964 依存性の研究：のぞましい依存性とは何か 日本心理学会第28回大会論文集 289.
- 江口恵子 1965 依存性の発達の研究：依存構造の型について 日本心理学会第29回大会論文集 298.
- Finney, J. C. 1961 Some maternal influences on children's personality and character. *Genet. Psychol. Monogr.*, 63, 199-278.
- Fitzgerald, B. J. 1958 Some relationship among projective test, interview and sociometric measures of dependent behavior, *J. abnorm. soc. Psychol.*, 56, 199-203.
- Flavell, J. H. 1963 *The developmental psychology of Jean Piaget*. Van Nost.
- Fromm, E. 1941 *Escape from freedom* (日高訳：自由からの逃走 東京創元社 1951)
- Fromm, E. 1947 *Man for himself*, Rinehart & Company Inc. (谷口ほか訳：人間における自由 東京創元社)
- Gewirtz, J. L. 1956 A factor analysis of some

- attention-seeking in young children. *Child Develpm.*, 27, 17-36.
- Gewirtz, J. L. 1956 A program of research on the dimensions and antecedents of emotional dependency. *Child Develpm.*, 27, 205-221.
- Gewirtz, J. L. & Baer, D. M. 1958 Deprivation and satiation of social reinforcers as drive conditions. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 57, 165-172.
- Gewirtz, J. L. & Baer, D. M. 1958 Deprivation on behavior for a social reinforcer. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 56, 49-56.
- Gewirtz, J. L. 1961 A learning analysis of the effect of normal stimulation, privation, and deprivation on the acquisition of social motivation and attachment, in Foss, B. M. (ed.) *Determinants of infant behavior*. Methuen.
- Gisvold, D. 1958 A validity study of the autonomy and deference subscales of the EPPS. *J. consult. Psychol.*, 22, 445-447.
- Hall, C. S. & Lindzey, G. 1957 Stimulus response theory. in Hall, C. S. & Lindzey, G. (eds.) *Theories of personality*. Wiley. 420-463.
- Hartup, W. W. 1958 Nurturance and nurturance-withdrawal in relation to the dependency behavior of young children. *Child Develpm.*, 29, 191-201.
- Harup, W. W. & Keller, E. D. 1960 Nurturance in preschool children and its relation to dependency. *Child Develpm.*, 31, 681-689.
- Hartup, W. W. 1963 Dependence and independence. in *62 NSSE Yearbook: Child Psychology*. 333-363.
- 原田敦子 1962 小学生の依存性についての一研究
日本教育心理学会第4回総会
- 波多野完治ほか 1965 ピアジェの発達心理学 国土社
- 林勝造, 一谷彊, 小島秀夫 1963 親に対する子どもの認知像の検査法 牧野書房
- Heathers, G. 1955 Acquiring dependence and independence: a theoretical orientation. *J. genet. Psychol.*, 77, 277-291.
- Heathers, G. 1955 Emotional dependence and independence in nursery-school play. *J. genet. Psychol.*, 77, 37-58.
- Heller, K. & Doldstein, A. P. 1961 Child dependency and therapist expectancy as relationship maintaining variables in psychotherapy. *J. consult. Psychol.*, 25, 371-375.
- Honigfeld, G. & Spigel, I. M. 1960 Achievement motivation and field independence. *J. consult. Psychol.*, 24, 550-551.
- 池見酉次郎 1965 愛なくば: 少女と医師の苦悶の記録 光文社
- 稲田準子 1955 母親の養育態度が幼児の依存行動に及ぼす影響について 日本心理学会第19回大会
- 井上雍子ほか 1963 青年一両親関係に関する研究(1) 青年の依存性と攻撃性 応用心理学会第30回大会
- Iscoe, I. & Carden, J. A. 1961 Field dependence, manifest anxiety and sociometric status in children. *J. consult. Psychol.*, 25, 184.
- Jakubczak, L. F. & Walters, R. H. 1959 Suggestibility as dependency behavior. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 59, 102-107.
- Kagan, J. & Mussen, P. H. 1956 Dependency themes on the TAT and group conformity. *J. consult. Psychol.*, 20, 29-32.
- Kagan, J. & Moss, A. H. 1960 The stability of passive and dependent behavior from childhood through adulthood. *Child Develpm.*, 31, 577-591.
- 加藤隆勝 1964 青年期: その心理と思想 誠信書房
- 久世敏雄 大西誠一郎 1958 家族関係の研究(2) 青年・両親関係: 心理的離乳 日本心理学会第28回大会
- Lessor, G. S. 1957 The relationship between overt and fantasy aggression as a function of maternal response to aggression. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 55, 218-221.
- Linton, H. B. 1955 Dependence on external influence correlates in perception attitudes, and judgment. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 51, 502-507.
- Livson, N. & Mussen, P. H. 1957 The relation of ego control to overt aggression and dependency. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 55, 66-71.
- Maslow, A. H. 1962 *Toward a psychology of being*. D. Van Nostrand. (上田訳: 完全なる人間 誠信書房 1964)
- McCandless, B. R. & Marshall, H. R. 1957 Sex differences in social acceptance and participation of preschool children. *Child Develpm.*, 28, 421-425.
- McCandless, B. R., Bilous, C. B. & Bennet, H. L. 1961 Peer popularity and dependence on

- adults in preschool-age socialization, *Child. Develpm.*, 32, 511-518.
- McClelland, D. 1953 *Achievement motive*. Appleton Century.
- McCord, W. et al. 1962 Familial and behavioral correlates of dependency in male child *Child Develpm.*, 33, 313-326.
- Miller, N. E. & Dollard, J. 1941 *Social learning imitation*. Yale Univer. Press.
- 三木安正ほか 1963 双生児による人格形成の研究Ⅰ 教心研 11, 14-23.
- 三木安正ほか 1964 双生児による人格形成の研究Ⅱ 教心研 12, 1-11.
- 三木安正ほか 1964 双生児による人格形成の研究Ⅲ 日本教育心理学会第6回総会
- Milton, G. A. 1958 A factor analytic study of child-rearing behaviors. *Child Develpm.*, 29, 382-392.
- 水島恵一 1963 青年の悩みと反抗 雪華社
- Mussen, P. H. et al. 1956 *Child development and personality*. Harper.
- Murray, H. A. 1938 *Exploration in personality*. (外村訳：パーソナリティ 誠信書房 1961)
- Navran, L. 1954 A rationally derived MMPI scale to measure dependence. *J. consult. Psychol.*, 18, 192.
- 西平直喜 1952 青年・両親関係の心理学的研究 野間教育研究所紀要 7 講談社
- 西平直喜 1959 青年心理学 国土社
- 中村陽吉 1964 集団内同調者の研究 日本心理学会第28回大会
- 荻野惺 1963 孤立的児童の性格と親子関係：幼児期と学童期の比較研究 日本心理学会第27回大会
- 荻野惺 1964 孤立児に関する心理学的研究 名古屋大学教育学部紀要 11, 269-279.
- 岡部静江 1964 孤立児とその指導, 保育 19-7, 7-10.
- Payne, D. E. & Mussen, P. H. 1956 Parent-child realtionships and father identification among adolescent boys. *J. abnorm, soc. Psychol.*, 52, 358-362.
- Piaget, J. 1949. *La Psychologie de L'intelligence*. Armand Colin (波多野, 滝沢訳：知能の心理学, みすず書房 1960.)
- Pruitt, W. A. et al. 1962 Dependency measures and chroniuty. *J. consult. Psychol.*, 26, 559-560.
- Riesman, D. 1953 *The lonely crowd*. Yale. Univer Press. (佐々木訳：孤独なる群衆 みすず書房 1958)
- Schaffer, H. R. & Emerson, P. E. 1964 The development of social attachments in infancy. *Monogr. soc. res. child develpm.*, 29, 3.
- Sears, R. R. 1951 Social behavior and personality development, in Parsons, T. & Shils, E. A. (eds) *Toward a general theory of action*. Haward Univer. Press. 465-478.
- Sears, R. R. et al. 1953 Some child rearing antecedents of aggression and dependency in young children. *Genet. psychol. Monogr.*, 47, 135-234.
- Sears, R. R. et al. 1957 *Patterns of child rearing*. Row Peterson.
- Sears, R. R. 1963 Dependency motivation. in *Nebraska symposium on motivation*. Univer. Nebraska Press. 25-64.
- Saers, R. R., Rau, L. & Alpert, R. 1965 *Identification and child rearing*. Stanford Univ. Press.
- 霜山徳爾 1964 自主性：そのトレーニング 誠信書房
- Siegel, A. E. et al. 1959 Dependence and independence in the children of working mothers. *Child Develpm.*, 30, 533-546.
- Snyder, W. U. 1963 *Dependency in psychotherapy: casebook*. Macmillan.
- Stendler, C. B. 1952 Critical periods in socialization and overdependency. *Child Develpm.*, 23, 3-12.
- Stendler, C. B. 1954 Possible causes of overdependency in young children. *Child Develpm.*, 25, 125-46.
- Stevenson, H. W. et at. (eds.) 1963 *Child psychology*, 62. *NSSE Yearbook : Part I*.
- Stith, M. et al. 1962 Dependence and helpfulness in young children. *Child Develpm.*, 33, 15-20.
- 津守真・稲毛教子 1960 幼児の依存性に関する研究 教心研 8, 210-220.
- 津守真 1961 親子関係と幼児のパーソナリティ発達 教心研 9, 129-145.
- 津守真・稲毛教子 1961 乳幼児精神発達診断法 大日本図書

- Waldrop, M. F. & Bell, R. Q. 1964 Relation of preschool dependency behavior to family size and density. *Child Developm.* 35, 1187-1196.
- Weis, P. et al. 1962 Dependency fantasy and group conformity. *J. consult. Psychol.*, 26, 61-64.
- Whiting, W. M. & Child, I. L. 1953 *Child training and personality*. Yale Univer.
- Winder, C. L. et al. 1962 Dependency of parents, psychotherapist's responses and aspects of psychotherapy. *J. consult. Psychol.*, 26, 129-134.
- Winterbottom, M. R. 1958 The relation of need for achievement to learning experiences in independence and mastery. in Atkinson, J. W. (ed.) *Motives in fantasy, action and society: A method of assesment and study*, D. Van Nostrand. 455-478.
- Witkin, H. A. et al. 1962 Analytical functioning in perception. in Witkin, H. A. et al. (eds.) *Psychological differentiation: studies of development*. Wiley. 35-58.
- 山本勝美 1965 同調性と依存性の関係についての実験的研究 年報社会心理学 6, 146-159.
- 依田新ほか 1961 質問紙による幼児の依存性の研究 教心研 9, 9-20.
- 依田新 1963 青年心理学 培風館
- Zuckerman M. & Gross, H. J. 1958 Suggestibility and dependency. *J. consult. Psychol.*, 22, 328.
- Zuckerman, M. 1958 The validity of the EPPS in the measurement of dependency rebellious-

- ness. *J. clini. Psychol.*, 14, 379-382.
- Zuckerman, M. et al. 1961 Construct and concurrent validity of direct and indirect measures of dependency. *J. consult. Psychol.*, 25, 316-323.
- Marshall, H. R. & McCandless, B. R. 1957 Relationships between dependence on adults and social acceptance by peers. *Child Developm.*, 28, 413-419.
- Marshall, H. R. 1961 Relations between home experiences and children's use of language in play interactions with peers. *Psychol. Monogr.*, 75.
- Mussen, P. & Distler, L. 1959 Masculinity, identification and father-son relationships. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 59, 350-356.
- Sears, P. S. 1953 Child-rearing factors related to playing of sex-typed roles. *Amer Psychol.*, 8, 431 (Abstract)

＜補註＞ 本稿を脱稿後、Sears, R. R. の依存性の発生についての学習理論的見方に対立するかなり有力な証拠が、attachment behavior という観点から提出されていることが、Walters, R. H. & Parke, R. D. の論文 (The role of distance receptors in the development of social responsiveness. in Lipsitt, L. P. & Spiker, C. C. (eds.) *Advances in child development and behavior*. Academic Press, 1965) により判明した。これについては別の機会にまとめてみたい。

(1965年10月13日原稿受付)

〔飯島論文 36ページからつづく〕

文 献

- 藤永保ほか 1963 実験教育法による幼児数概念の研究Ⅱ. 教育心理学研究11, 75-85.
- Green, B. G. 1956 A method of scalogram analysis using summary statistics. *Psychometrika* 21, 79-88.
- 飯島婦佐子 1965 幼児の数概念に関する実験的研究. 教育心理学研究, 13, 220-233.
- 前典子ほか 1964 数概念発達に関する学習系列別尺度作製に関する試み. 日本教育心理学会第6回総会.

森永良子ほか 1964 数概念発達に関する学習系列尺度作製に関する試み 日本教育心理学会第6回総会.

Wohlwill, J. F. 1960 A study of the development of the number concept by scalogram analysis. *J. genet. Psychol.* 97, 342-377.

横地清ほか 1964 科学化をめざす算数教育, 小学校低学年 基礎と実践. 誠文堂新光社.

＜付記＞ 本研究を進めるにあたり、ご指導ご協力下さった東京都立大学山下俊郎教授、辻正三助教授ならびに研究室の先生方と、被験者の方々に感謝いたします。

(1965年10月19日原稿受付)